

## 英語の swiping 構文の通時発達： 前置詞残留分析の妥当性をめぐって\*

岩 崎 宏 之<sup>1</sup>

### A Research on the Development of Swiping in the History of English: An Argument against Its P-stranding Analyses

Hiroyuki IWASAKI

#### 1. はじめに

タイトルにある swiping とは、Merchant (2002) が考案した sluiced *wh*-word inversion with prepositions in Northern Germanic の略称で、英語の場合は (1) のような文を指す<sup>2</sup>。

(1) Lois was talking, but I don't know who to ~~(Lois was talking)~~.

(Merchant (2002 : 294), 筆者により一部加筆)

その名の示す通り、(1) では、スルーシング (sluicing) が適用されている but 以降の右側の等位項において疑問詞 *who* と直後の前置詞 *to* が倒置を起こしており、意味上 *to* の目的語はその直前にある *who* に相当する。この swiping 構文の持つ、英語で一般的に見られる語順から逸脱しているという特異な性質を被説明項の1つとして掲げつつ、これまでに当該構文に関して多様な分析が提案されてきたが、そのほとんどは現存する言語を対象とした共時的研究であり、古い時代の言語における swiping 構文を対象とした本格的な通時の研究は、筆者の知る限り事実上皆無である<sup>3</sup>。このような swiping 構文研究の現状を踏まえ、本稿では英語の swiping 構文の通時発達を取り上げ、本稿で得られた知見がこれまでの swiping 構文の共時的分析に対してどのような意味合いをもたらすかを論じる。

#### 2. swiping 構文の共時的分析：前置詞残留分析

本節では、先行研究で提案されてきた swiping 構文の共時的分析を概観する。内容上の観点から先行研究の分析を幾つかの種類に分類することができるが、ここでは、その中で最も広い支持を集めている前置詞残留 (P-stranding) 分析 (Hasegawa (2006), Murphy (2016), Nakao

\*本研究は JSPS 科学研究費補助金若手研究 (課題番号 18K12410) の助成を受けている。

<sup>1</sup> 東邦大学薬学部英語教室

<sup>2</sup> Culicover (1999) や Culicover and Jackendoff (2005) は、(1) のような文を sluice-stranding と呼んでいる。

<sup>3</sup> Radford and Iwasaki (2015) は、古い英語における swiping 構文にも言及している点で例外的な研究と見做すことができる。3 節以降の議論も参照のこと。

(2007), Radford and Iwasaki (2015), Sugisaki (2007), van Craenenbroeck (2004, 2010)) のみを見ていくことにする<sup>4</sup>.

前置詞残留分析では, swiping 構文は (2) のような統語派生の出力として生成される<sup>5</sup>.

- (2) (Lois was talking, but I don't know ...)
- a. [<sub>CP</sub> [<sub>IP</sub> she was talking [<sub>PP</sub> to who]]]
- b. [<sub>CP</sub> who [<sub>IP</sub> she was talking [<sub>PP</sub> to t]]]
- c. [<sub>CP</sub> who [<sub>IP</sub> she was talking] [<sub>PP</sub> to t]]
- d. [<sub>CP</sub> who [<sub>PP</sub> to t]]

(Hasegawa (2006 : 437))

(2a) では, who が CP 指定部に移動しているが, その移動に際し前置詞の to が取り残されることになるため, この段階で前置詞残留が生じる<sup>6</sup>. 次に, PP が IP の外側に移動し, その後, IP に対してスルーシングが適用され省略される. 結果的に生成されるのが (2d) で, その中で目に見える顕在的な連鎖は who to であり, 前節で述べた swiping 構文に特徴的な「前置詞の目的語—前置詞」という語順が生じる.

この前置詞残留分析が広く受け入れられている大きな要因の1つは, 当分析によって swiping 構文に関する次の事実が自然な形で捉えられるからである.

(3)

	English	Danish	Norwegian	Icelandic	Frisian	Swedish	German	Dutch
P-stranding	✓	✓	✓	✓	✓	✓	×	×
Swiping	✓	✓	%	×	×	×	×	×

(Murphy (2016 : 2))

(4) *Swiping/P-stranding Generalization*:

If a language has swiping, it also allows P-stranding.

(Murphy (2016 : 2))

(3) に示されているように, 英語とデンマーク語は前置詞残留と swiping 構文の両方が可能

<sup>4</sup>その他の分析としては, [i] 随伴 (pied-piping) 分析 (Merchant (2002)), [ii] "Decomposed Merge" 分析 (Larson (2012)), [iii] "syntactic nut" 分析 (Culicover (1999)) 等がある. 6 節の議論も参照のこと.

<sup>5</sup>Nakao (2007) は, (2a) と (2b) のプロセスが逆の統語派生を提案している. また, 同じ前置詞残留分析のカテゴリーに属しながらも, Hasegawa や Nakao のものとは技術的詳細が異なる統語派生も提案されている.

<sup>6</sup>生成文法理論の極小モデルが展開していく中で, 指定部という概念の存在意義が疑われてきているが (cf. Chomsky (2013), Starke (2004)), ここでは説明の便宜上, 指定部という用語を使うことにする.

な言語であり、ノルウェー語の場合は前置詞残留が可能である一方、swiping 構文に関しては容認できる話者と容認できない話者とが混在している。残りのアイスランド語・フリジア語・スウェーデン語・ドイツ語・オランダ語では、swiping 構文は一貫して不可能であるが、前置詞残留が可能かどうかについては言語によって変異が見られる。ここから把握できる規則性は、swiping 構文を許容する英語・デンマーク語・ノルウェー語がいずれも前置詞残留も許容しているということである。Murphy (2016) はこの事実を (4) として提示し、類型論的一般化として定式化している。

swiping 構文に対する前置詞残留分析は、swiping 構文の生成において前置詞残留が関与していると主張する分析であるため、上の類型論的一般化がその分析の中で適切に表現されていることになる。swiping 構文に対して前置詞残留分析以外の分析を採用する場合には、swiping 構文と前置詞残留との関係性について別途論述が必要となることを鑑みると、前置詞残留分析が他の分析よりも優位に位置付けられているのも理に適ったことと言える。

### 3. Radford and Iwasaki (2015)

次に、swiping 構文の先行研究の1つである Radford and Iwasaki (2015) に目を向ける。この論文は、現代英語の swiping 構文を扱った共時的研究として数えるべきものであるが、注3で指摘したように、昔の英語の swiping 構文のことにも触れている点で、当該構文の研究史上で先駆的な位置を占める。その昔の英語の swiping 構文について、Radford and Iwasaki は次のように記している。

- (5) [ . . . ] Susan Pintzuk kindly searched 3 corpora for us, covering the earliest stages of Old English through Early Modern English: the York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English (Taylor et al. 2003), the Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English (Kroch and Taylor 2000) and the Parsed Corpus of Early English Correspondence (Taylor et al. 2006). She reports that **WH+P-fronting structures were restricted to occurring with r-words (where, here, there)** and that they occurred in a full range of *wh*-clauses, including direct and indirect questions, relative clauses and free relatives. **3,672 of the 3,688 WH+P-fronting structures in the corpora (99.6%) were unsluiced, while 16 (0.4%) were sluiced.**

(Radford and Iwasaki (2015 : 737), 強調は筆者)

調査がなされたコーパスから、(5) で問題となっている swiping 構文が古英語期・中英語期・初期近代英語期のものであることが分かる。当時の swiping 構文の持つ特徴として、まず1つ目の強調のところで、前置詞の目的語に相当する疑問詞が *where* しか許されていないことが述べられている。これらの特徴は共に、現代英語の swiping 構文には基本的には備わっていない。現代英語の swiping 構文では、(6) に示されるように、疑問詞が *where* 以外でも容認される<sup>7</sup>。

<sup>7</sup> Merchant (2002 : 294-296) によれば、疑問詞が2語以上で構成されている場合は、話者によって容認度が変わるものもある (e.g. % how long, % how much, % how many), どの話者によっても容認されないものもある (e.g. \* how rich, \* what time).

- (6) a. Lois was talking, but I don't know who to. (= (1))  
 b. They were arguing; God only knows what about.  
 c. He'll be at the Red Room, but I don't know when till.

(Merchant (2002 : 294))

また、現代英語の swiping 構文の場合は、省略を伴うことがほとんどである<sup>8</sup>。従って、古英語・中英語・初期近代英語の頃には、現代英語の swiping 構文はまだ確立していなかったと結論付けることができる。この結論を目の当たりにして即座に提起される問いは、英語の歴史の中で現代英語の swiping 構文が現れるようになったのはいつ頃か、というものである。この疑問の解決に向け、筆者は独自にコーパス調査を実施した。次節で、その調査結果を示す<sup>9</sup>。

#### 4. コーパス調査結果

まず、調査の対象としたコーパスであるが、それは次の2点である。

- (7) a. the Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME)  
 b. the Penn Parsed Corpus of Modern British English, second edition (PPCMBE2)

(7a) は初期近代英語のテキストを、(7b) は後期近代英語のテキストをそれぞれ収録したコーパスである。初期近代英語については Radford and Iwasaki (2015) の中でも既に調査がなされているが、異なるコーパスを使用していることもあり、Radford and Iwasaki が報告していなかった現代英語の swiping 構文の例が発見できる可能性がある。

続いて、調査結果を以下に示す。(7a) の PPCEME を調査したところ、現代英語の swiping 構文の例は1つも存在しなかった。これは Radford and Iwasaki と全く同じ結果であり、先に述べた可能性が否定されたことになる。しかし、別の見方をすれば、筆者の調査結果は、初期近代英語はまだ swiping 構文が未発達段階であったという見解に対して更なる証拠を提供していることにもなる。

次に、(7b) の PPCMBE2 の調査結果であるが、こちらについては5つの例が検出された。例が含まれる周辺文脈も添えながら、年代順に例を挙げていくことにする。

- (8) a. but she sends a Person to let them know, She has no further Service for them;  
 and, That they must quit their Place; tho' they do not know what for:  
 (JUSTICE-1739-2, 32. 534 : 11<sup>10</sup>)

<sup>8</sup> 省略を伴わない swiping 構文の例は、Merchant (2002 : 298) が提示した (i) の条件によって排除される。

(i) The sluicing condition:  
 Swiping only occurs in sluicing.

ただし、最近になって Tyler (2017) は、疑問詞が等位接続されている場合は省略を伴ってなくとも容認可能であることを指摘している。

(ii) Speed is defined to be distance divided by time; when and who by was this definition first put forward?  
 (Tyler (2017 : 291), 強調は原著者)

<sup>9</sup> この調査結果そのものは、既に Iwasaki (2018) において報告されている。

<sup>10</sup> PPCMBE2 の時代区分は以下の通りである。11 : 1700-1769, 12 : 1770-1839, 13 : 1840-1914。

- b. If any of Her Majesty's Nobles, or any other inferior Persons, who have any Place in her Service, do any thing that she does not approve of, they are not brought to any Tryal; but she sends a Person to let them know, She has no further Service for them; and, That they must quit their Place; tho' they do not know what for: But this is a very kind Sentence.

([https://books.google.co.jp/books?id=PJFeAAAAcAAJ&pg=PA50&lpg=PA50&dq=%22elizabeth+justice%22+%22a+voyage+to+russia%22&source=bl&ots=7TR5VpUX2G&sig=5lcGYsnlpEs\\_V-RiUEWYsmi0dww&hl=ja&sa=X&ved=0ahUKEwi9pZihiPrZAhWKmpQKHeHsDH84ChDoAQhjMA8#v=snippet&q=%22seldom%20done%22&f=false](https://books.google.co.jp/books?id=PJFeAAAAcAAJ&pg=PA50&lpg=PA50&dq=%22elizabeth+justice%22+%22a+voyage+to+russia%22&source=bl&ots=7TR5VpUX2G&sig=5lcGYsnlpEs_V-RiUEWYsmi0dww&hl=ja&sa=X&ved=0ahUKEwi9pZihiPrZAhWKmpQKHeHsDH84ChDoAQhjMA8#v=snippet&q=%22seldom%20done%22&f=false), [37], 強調は筆者)

(8) は、1739年に書かれた *A Voyage to Russia: Describing the Laws, Manners, and Customs, of that Great Empire, as Governed at this Present by that Excellent Princess, the Czarina* という旅行記の一節で、“what for” は、使えている人たちがその立場を追われることになってしまう理由を表している。この what for は、現代英語においても理由を表す表現として用いられている。

- (9) a. But what at, my dear? (PLANCHE-1827-2, 13. 182 : 12)  
 b. Ha, ha, ha! pardon me, my dear Lady Speyenhause, but I must laugh, ha, ha, ha! Lady. **But what at, my dear?** I am delighted to see you so merry, but I \$can \$not {TEXT:cannot} understand what particularly excites your risibility.

(9) は、1827年頃に書かれた *The Green-eyed Monster: A Comedy, in Two Acts* という喜劇の一部で、“what at” の at は、前の文にある動詞 laugh によって選択されている前置詞であり、故に what は何に対して笑ってしまうか、その刺激となるものに相当する。前置詞の目的語が前置詞の前に生起しており、当該の連鎖は swiping 構文の一例と見做すことができる。

- (10) a. Where from? (FROST-1840-1, 212. 2139 : 13)  
 b. Sir F. Pollock: How old are you?  
 Frost: I am sixteen; I cannot say exactly the month, but about three months. I am sixteen and three months.  
 Sir F. Pollock: Which way were you coming when you saw these people first?  
 Frost: I was going to my breakfast, and I saw all the people running out, and I ran up to them and asked what was the matter.  
 Sir F. Pollock: I ask, where were you going when you saw them?  
 Frost: I was going to Pill.  
 Mr. Attorney-General: That is Pillgwenlly?  
 Sir F. Pollock: Where do you breakfast?  
 Frost: At home.  
 Sir F. Pollock: Where is that?

Frost: James Manning's, Pill.

Sir F. Pollock: You were going there for your breakfast?

Frost: Yes.

Sir F. Pollock: **Where from?**

Frost: From the blacksmith's shop.

(<https://books.google.co.jp/books?id=YgRN335m9IQC&printsec=frontcover&dq=The+trial+of+John+Frost&hl=ja&sa=X&ved=0ahUKEwjatKiloPrZAhXF55QKHZKDAeQQ6AEIJzAA#v=onepage&q=The%20trial%20of%20John%20Frost&f=false>, 強調は筆者)

(10) は、1840年に書かれた *The Trial of John Frost, for High Treason: Under a Special Commission, Held at Monmouth, in December 1839, and January 1840* という裁判記録からの例で、(10b) は、Sir F. Pollock が Frost を詰問している場面である。(10b) の中盤あたりから Frost がどこで朝食を採ったのかが話題となり、Frost が家で食べたことを証言すると、更に Sir F. Pollock はどこから家に向かったのかを聞き出そうと、“Where from?” という質問を Frost に投げかけている。その質問に対し Frost が “From the blacksmith's shop.” と答えたところで (10b) が終わっている。Frost による回答が英語でよく見られる普通の語順であるのに対し、Sir F. Pollock の “Where from?” という質問は語順が逆になっており、swiping 構文の例であることが容易に判断できる。

(11) a. ‘What about?’ (TROLLOPE-1879-2, 30. 590 : 13)

b. ‘You know Mrs Finn,’ Tregear said to his friend one morning at breakfast. I remember her all my life. She used to be a great deal with my grandfather. I believe he left her a lot of diamonds and money, and that she wouldn't have them. I don't know whether the diamonds are not locked up somewhere now, so that she can take them when she pleases. What a singular woman! It was odd; but she had some fad about it. What makes you ask about Mrs Finn? She wants me to go and see her. **What about?** ‘I think I have heard your mother speaks of her as though she loved her dearly,’ said Tregear. I don't know about loving her dearly. They were intimate, and Mrs Finn used to be with her very much when she was in the country. She was at Matching just now, when my poor mother died. Why does she want to see you?

([https://books.google.co.jp/books?id=ez-vDAAAQBAJ&pg=PT28&lpg=PT28&dq=%22The+duke%27s+children%22+%22what+about%22&source=bl&ots=tnXHOv-6lW&sig=PhMOlLbL2YRJunevhEF\\_loiPH9c&hl=ja&sa=X&ved=0ahUK Ewi45pKH0PrZAhXKppQKH7iDusQ6AEIPDAD#v=onepage&q=%22The%20duke's%20children%22%20%22what%20about%22&f=false](https://books.google.co.jp/books?id=ez-vDAAAQBAJ&pg=PT28&lpg=PT28&dq=%22The+duke%27s+children%22+%22what+about%22&source=bl&ots=tnXHOv-6lW&sig=PhMOlLbL2YRJunevhEF_loiPH9c&hl=ja&sa=X&ved=0ahUK Ewi45pKH0PrZAhXKppQKH7iDusQ6AEIPDAD#v=onepage&q=%22The%20duke's%20children%22%20%22what%20about%22&f=false), 強調は筆者)

(11) は、1879年に書かれた *The Duke's Children* というフィクションの一節で、Mrs Finn が I に会いに来てほしいとっていて、「何のことで会いに来てほしいと思っているのか」と

I が自分の感情を吐露しているのが “What about?” という表現である。周辺文脈から判断する以外には “What about?” が swiping 構文の例であることを確認する手段が存在しないが、解釈上 what が about の目的語であると考えるのが適当である。

(12) a. What of? (BENNETT-1911-2, 33. 580 : 13)

b. Flora: One second, dearest. You're unique as an aviator, aren't you?

Cedric: Oh—well—

Flora: Now. Man to man. Give your modesty a rest. Really, don't you consider you've proved yourself unique in your line?

Cedric: I suppose I'm just about as unique as in my line as you are in yours, my dear.

Flora: Now that's very nice of you.

Cedric: Not at all.

Flora: Yes, it is, because it's exactly what I wanted you to say. You've often said that I'm unique, and I just wanted you to say it again at this identical particular instant. Of course I could have reminded you of it, but that wouldn't have been quite so effective. That's why it's very nice of you.

Cedric: So you are unique—I'll say it as often as you like.

Flora: I warn you, you're giving yourself away.

Cedric: Delighted!

Flora: I wouldn't care to repeat all the lovely adjectives you've used about me. If you weren't such a determined enemy of gush and superlatives—people might suspect that sometimes you exaggerated the tiniest bit when you talked about me, to me. But of course I know you never do exaggerate, at any rate consciously, and you know you're a very good judge.

Cedric: **What of?**

Flora: Us!

(<https://books.google.co.jp/books?id=bDVRDwAAQBAJ&printsec=frontcover&dq=%22The+honeymoon:+a+comedy+in+three+acts%22&hl=ja&sa=X&ved=sa=X&ved=0ahUKEwjDqO7IoPrZAhWIppQKHYGmAoYQ6AEIJzAA#v=onepage&q=%22The%20honeymoon%3A%20a%20comedy%20in%20three%20acts%22&f=false>, 強調は筆者)

(12) は、1911年に書かれた *The honeymoon: a comedy in three acts* という喜劇からの抜粋だが、(12b)の最後の方の Cedric による “What of?” という発話の前後に、Flora の “you know you're a very good judge” と “Us!” という2つの発話がある。これらは、その発話順に、直前で述べられていたことに対して情報を次々と付け加えていっているものと解釈できる。つまり、まず Flora が “you know you're a very good judge” と言ったことに対して、Cedric が “What of?” と何を評価する人なのかを Flora に問い掛け、それに対して Flora が “Us!” と返答し、自分たちのことを評価する人なのだと答えている構図である。そして、この3つの

発話を全て繋ぎ合わせると、you know you're a very good judge of us という英文が出来上がる。of us の us は疑問詞 what に対する具体的な値に相当するため、what は of の目的語であると捉えることができ、“What of?” が語順の倒置という swiping 構文の特徴を備えていることが確認される。

(7b) の PPCMBE2 が後期近代英語のテキストを集めたコーパスであることを踏まえると、現代英語の swiping 構文は後期近代英語になって初めて英語の歴史上姿を現したことになる。この知見は、単に「英語の歴史の中で現代英語の swiping 構文が現れるようになったのはいつ頃か」という上で立てた問いに答えたというだけでなく、筆者の知る限りにおいてこれまでの swiping 構文研究の中で提出されることのなかった命題であり、当該構文の研究史に対して一定の寄与を成すものと思われる。

## 5. 考 察

本節では、前節で得られた知見と照らし合わせながら、swiping 構文に対するこれまでの共時的研究、とりわけ2節で概観した前置詞残留分析に与える含意について考察する。

(5) に挙げた Radford and Iwasaki (2015) による観察、及び、筆者による PPCEME の調査から、初期近代英語の段階では swiping 構文がまだ現代英語のように発達していないことが明らかとなった。その一方で、swiping 構文に対する共時的研究の中で積極的に採用されている前置詞残留分析の方に目を転じると、その根底にある前置詞残留について、古英語期はあまり生産的でなかったものの、中英語期に入って次第に事例数が増えてきたことが観察されている (cf. Allen (1980), Matsumoto (2013)). そして、古英語期の頃からスルーシングの適用を伴う省略現象が存在することが Nykiel (2010) 等によって指摘されている。これらの諸事実に基づいて推論すると、swiping 構文に関して、古英語期は事例数がそれほど多くなく、中英語期になって使用頻度が有意に高まるはずであることが予測されるが、現実には起こったこととは全く整合しない。これは、swiping 構文の生成において前置詞残留が関与していないことを意味するものであり、当該構文に対する前置詞残留分析が妥当であるとは言えないことを示唆している。

続いて、前節で得られたもう一方の知見、すなわち、現代英語の swiping 構文が後期近代英語期になって初めて可能となった事実に着目しながら論を進めていきたい。上述したように、前置詞残留は中英語期を境に徐々に生産的になっていったのであるが、後期近代英語期の前置詞残留の実態について、Yáñez-Bouza (2015) は興味深い指摘を行っている。

- (13) The diachronic distribution shows that the use of stranded prepositions increases steadily during the EModE period to the extent that at the end of the seventeenth century its frequency has almost trebled. The eighteenth century witnesses a reversal in trends: the gradual increase comes to a halt in the first half of the century, followed by a sharp decline in the second half, to a level lower than the frequency observed in the late sixteenth century. At the start of the nineteenth century the use of P-stranding increases moderately, and continues rising in the latter half of the LModE period, yet slowly and with a frequency lower than in the late seventeenth century.

(Yáñez-Bouza (2015 : 122), 筆者により一部修正)



- (14) Thus, we need to consider the late seventeenth century and early eighteenth century as the key periods for the emergence of the stigma against P-stranding.

(Yáñez-Bouza (2015 : 125))

- (15) [ . . . ] I will argue that the origin of this latent awareness can be found in seventeenth-century works, especially in grammars of English through the teaching of Latin, and in the explicit proscription of end-placed prepositions by the literary writer John Dryden. The normative tradition emerged in the late seventeenth century and so too did the stigmatisation of P-stranding.

(Yáñez-Bouza (2015 : 126))

(13) では、後期近代英語期辺りの時期に前置詞残留に関してどのようなことが起こったかが記されており、後期近代英語期以前の 17 世紀までの使用頻度の上昇とは反対に、後期近代英語期の 18 世紀に入り、その後半から使用頻度が著しく低下し、19 世紀になって前置詞残留の使用が徐々に増加するも、その速度はゆっくりで、使用頻度も 17 世紀後半より低かったと Yáñez-Bouza は観察している。そして (14) から、その使用頻度の低下が 17 世紀後半から 18 世紀前半にかけての頃の時代背景に起因していると考えられること、さらに (15) から、Yáñez-Bouza がその原因を、ラテン語文法を規範として英文法を保持しようとする思想、及び、文末の前置詞を誤用として禁止しようとする運動と同定していることが読み取れる。

(8) から (12) で挙げた後期近代英語期の swiping 構文の 5 例のうちの 4 つが、19 世紀以降のものであることは注目に値する。なぜならこの時期は、前置詞残留の使用頻度がピークに達していた 17 世紀よりも使用頻度が低かった時期に対応するからである。言い換えると、前置詞残留の使用頻度が低かった時期にもかかわらず、その時期により多くの swiping 構文の例が存在していたことになる。この事実、swiping 構文と前置詞残留との間に直接的な関係を持たせようとする見方に対して疑問を呈するものであり、前置詞残留分析の非妥当性を示す更なる論拠となる。

## 6. まとめと今後の展望

本稿では、swiping 構文に関する共時的研究によって蓄積された洞察を踏まえながら英語における当該構文の通時的な研究を実施し、現代英語の swiping 構文が英語史上で初めて可能となったのは後期近代英語期になってからであることを突き止めた。更に、その知見に基づく形で、swiping 構文研究の歴史の中で最も支持されてきた前置詞残留分析が、必ずしも正しい分析とは言えないことを論じた。

本稿は前置詞残留分析を否定する立場なのであるから、swiping 構文に対する分析として逆にどのようなものが最も適切なのかという問いに関して、何らかの態度を表明する必要がある。もちろん、この場で説得力のある議論を展開することは不可能であるが、今後の展望として、Culicover (1999) の提唱する “syntactic nut” 分析を推し進めることの有効性を示唆して筆を置きたい。“syntactic nut” 分析とは概略、所与の構文を何らかの固定表現 / イディオムとして捉える考え方である。swiping 構文に対してこの分析を採用しようとする企ては、次の Radford and Iwasaki (2015) が示した観察によってある程度正当化できる。

- (16) Since there was no material intervening between the r-word and the preposition, since the fronted constituent was always a word and never a phrase, and since the r-word and preposition were generally (in 3,582 of 3,688 cases, i.e. 97.1%) written as a single word, it seems reasonable to hypothesize that WH+P-fronting involved head-adjunction—i.e. adjunction of an r-word to a preposition.

(Radford and Iwasaki (2015 : 737), 強調は筆者)

(16) は (5) にそのまま続くものなのであるが、強調のところで述べられているように、前期近代英語期以前の swiping 構文の大部分において、疑問詞と前置詞は別々の語としてではなく1語として表現されていたのである。「1語」ということなので、問題の疑問詞と前置詞は合成的に2つが結び付いているのではなく、まさしく固定表現になっていて、2つで1語扱いとなっているのである。“syntactic nut”分析の下で現代英語の swiping 構文を考えた場合、当構文は、元々疑問詞と前置詞で1語だったものが、時代を経るにつれてそれらが2語に分化することで成立した、という通時的変化が想定できる。その分化のプロセスの中に、スルーシングの適用による省略が swiping 構文においてできるようになったことをどのように組み入れるのか、更には、(4) の *Swiping/P-stranding Generalization* をどのように解釈すべきかといった論点が存在するが、そういった論点は今後の研究で取り組むべき重要な課題となる。

#### 参考文献

- Allen, Cynthia (1980) *Topics in English Diachronic Syntax*. Garland, New York.
- Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33-49.
- van Craenenbroeck, Jeroen (2004) *Ellipsis in Dutch Dialects*, Doctoral dissertation, Leiden University.
- van Craenenbroeck, Jeroen (2010) *The Syntax of Ellipsis: Evidence from Dutch Dialects*, Oxford University Press, Oxford.
- Culicover, Peter W. (1999) *Syntactic Nuts: Hard Cases, Syntactic Theory, and Language Acquisition*, Oxford University Press, Oxford.
- Culicover, Peter W. and Ray Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*, Oxford University Press, Oxford.
- Hasegawa, Hiroshi (2006) “On Swiping,” *English Linguistics* 23, 433-445.
- Iwasaki, Hiroyuki (2018) “A Diachronic Investigation of Swiping in English,” paper presented in *Conceptual and Methodological Alternatives in Theoretical Linguistics*, University of Tsukuba.
- Larson, Bradley (2012) “Swiping and Decomposed Merge,” ms., University of Maryland, College Park, MD.
- Matsumoto, Yosuke (2013) “On the Historical Development of Preposition Stranding in English,” *English Linguistics* 30.1, 151-168.
- Merchant, Jason (2002) “Swiping in Germanic,” *Studies in Comparative Germanic Syntax*, ed. by C. Jan-Wouter Zwart and Werner Abraham, 289-315, John Benjamins, Amsterdam.
- Murphy, Andrew (2016) “A Note on the Swiping/P-Stranding Generalization,” ms., Universität Leipzig. [available at: <http://ling.auf.net/lingbuzz/003131>].
- Nakao, Chizuru (2007) *Copy Free Movement, Swiping and the ECP*, General Paper, University of Maryland, College Park, MD. [available at: [http://www.ling.umd.edu/~cnakao/Nakao\\_895.pdf](http://www.ling.umd.edu/~cnakao/Nakao_895.pdf)].
- Nykiel, Joanna (2010) “Whatever Happened to English Sluicing,” *Studies in the History of the English Language V: Variation and Change in English Grammar and Lexicon: Contemporary Approaches*, ed. by Robert A. Cloutier, Anne Marie Hamilton-Brehm, and William A. Kretzschmar, Jr., 37-59, Walter de Gruyter, Berlin.
- Radford, Andrew and Eiichi Iwasaki (2015) “On Swiping in English,” *Natural Language and Linguistic Theory* 33, 703-744.
- Starke, Michal (2004) “On the Inexistence of Specifiers and the Nature of Heads,” *Structures and beyond: The Cartography of Syntactic Structures*, vol.3, ed. by Adriana Belletti, 252-268, Oxford University Press, New York.

- Sugisaki, Koji (2007) "The Syntax of Swiping: A View from Child English," ms., Mie University.
- Tyler, Matthew (2017) "Swiping without Sluicing," *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 23.1, 291-300.
- Yáñez-Bouza, Nuria. (2015) *Grammar, Rhetoric and Usage in English: Preposition Placement 1500-1900*, Cambridge University Press, Cambridge.

#### コーパス

- Kroch, Anthony, Beatrice Santorini, and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME). Department of Linguistics, University of Pennsylvania. CD-ROM, first edition, release 3 (<http://www.ling.upenn.edu/ppche/ppche-release-2016/PPCEME-RELEASE-3>).
- Kroch, Anthony, Beatrice Santorini, and Ariel Diertani (2016) *The Penn Parsed Corpus of Modern British English* (PPCMBE2). Department of Linguistics, University of Pennsylvania. CD-ROM, second edition, release 1 (<http://www.ling.upenn.edu/ppche/ppche-release-2016/PPCMBE2-RELEASE-1>).